特集「〈翻訳〉の季節—横光利一と同時代文学」

中国語に訳された横光利一文学

謝　惠貞

一　はじめに

横光利一は一九二〇～三〇年代日本新感覚派の旗手としてだけでなく、台湾、中国、韓国の文学界を風靡した東アジアのモダニストとしても名を残した。その背景には、日本の植民地領有による日本語の普及と、翻訳の流通が介在している。

そこで、横光の文体における多様な革新、また文学技巧の実験は、東アジアの近現代のモダニズム文学を啓蒙し、影響を及ぼし、日本文学史は当然のこと、台湾、中国、韓国などの文学史にも記されるほど貢献をした。

例えば、戦前の台湾では、日本の植民地統治下の政策により、漢文の使用が抑圧され、日本語教育が日本文学を吸収する基礎となり、また日本語による創作が次第に主流となった。劉吶鷗、巫永福、龍瑛宗などが、横光を含む日本「内地」文壇の動向に注目し、それを糧に、独自の文体を作り出した。

中でも、特筆すべきなのは、上海で新天地を求めた劉吶鷗である。彼は翻訳小説集『色情文化』で、横光の「七階の運動」などの当時の日本の新興小説を訳し、訳者前記で「訳者がここで一つ言わねばならないのが、ここに訳した幾人かの文章についてである。彼らの文章は正統の日本文には属さない。彼らの文章は現代日本の生活に基づいて新しく作り出されたものである。……しかし聡明な読者が読めば、それらを難しく感じないばかりか、逆に新鋭的で、活発で愛すべきものに思われることだろう」[1]と、読者の読みを誘導している。更にその文体の模作となる中国語創作小説集『都市風景線』を世に出し、横光を継承した正統性を主張した。その後、新聞雑誌では、彼自身を第二の横光、そして、彼に影響を受けた穆時英、黒嬰などの作家を、第三、第四の横光だと称し始めた。[2]劉自身の戦略が、読書市場に受け入れられ、中国文学史上最初のモダニズム流派を創出した。横光は実にその開祖とも言える地位を占めている。

一方、台湾では、戦前、日本統治下の植民地教育により、翻訳を介さずに、横光を受容していた。[3]戦後は、日本語世代の文学愛好家、例えば、黄玉燕、劉慕沙が、横光文学を含む、日本文学を翻訳紹介する担い手と化している。小稿は、中国語に訳された横光文学を調査し、「作品別の翻訳状況と回数」を分析し、最も翻訳された作品の同時代評を通して、その横光認識の特徴を解析する。

二　中国語に訳された横光文学

網羅的に、横光文学の中国語訳を摘出するために、現時点で最適と考えられる下記の五つのデーターベースを利用する。中国の部分は、中国最大の雑誌新聞記事の検索システム「知網（CNKI）」（https://kns・cnki・net/kns八/defaultresult/index）で作者欄を「横光利一」にして検索し、また、一八三三年～現在の雑誌新聞、二万余種類を収録する「全国报刊索引数据库」（全国新聞雑誌検索データーベース）（https//www.cnbksy.com）と中国国家図书馆（http//www・nlc.cn/）の「馆藏目录」（館内所蔵）で「横光利一」をキーワードに「中文及特藏文」（中国語及び貴重文献）を検索した。また、台湾の図書と雑誌を対象とした「臺灣書目整合査詢系統（SMRT）」（http//metadata.ncl.edu.tw/）、及び一九五一年からの台湾の主な新聞記事が対象の「台湾新聞智慧網（Taiwan News Smart Web）」（http//tnsw.nlpi.edu.tw/login_newspaper.htm）で「横光利一」をキーワードとして検索した。

二〇二〇年一一月一日現在の検索結果について、重複するものを省き、翻訳された回数の多い順に、表一「作品別の翻訳状況と回数一覧」[4]にまとめた。灰色の部分は台湾で出版されたものである。なお、翻訳回数が五回以下のものは、表の後にまとめる。また、李振声訳『感想与风景』（海口：南海出版公司、一九九八）をA、李振声訳『感想与风景』（桂林：广西师范大学出版社、一九九八）をB、張平訳『感想与风景』（成都：四川文艺出版社、二〇一三）をC、張平訳『感想与风景』（成都：四川文艺出版社、二〇一五）をD、王天慧訳『横光利一评论散文集选编』（南昌：江西人民出版社、二〇一九）をEと略する。

「表一」「作品別の翻訳状況と回数一覧」

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
蠅	『自決』一巻一四期	羣源	北平	一九三二
蠅	『光華附中半月刊』二巻九～子嬰一〇期		上海	一九三四
蠅	『行素』一巻五～六期	張香山	開封	一九三五
蠅	『聯合報』一四面聯合副刊	劉慕沙	台北	一九七三
横光利一的短篇小説两篇：蠅	『当代外国文学』三期	陈德文	南京	一九八三

二三・五。

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
苍蝇	『日语学习与研究』	雷定平	北京	一九八三・三
蝇	『当代外国文学』	陈德文	南京	一九八三
苍蝇	『日本新感覚派作品选』作家出版社	三明	北京	一九八八
蝇	『世界文學大師選第八冊春天乘著馬車來』洪範	劉慕沙	台北	一九九八
蝇	『春天坐馬車來』桂冠	黄玉燕	台北	二〇〇〇
蝇	『横光利一文集』作家出版社	唐月梅	北京	二〇〇一
蝇	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇〇七
苍蝇	『苍蝇』吉林大學出版社	商雨虹	長春	二〇〇九
蝇	『中学生百科・大语文』	不明	长沙	二〇一八・二
蝇	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇一九

二位、「ナポレオンと田虫」（計一〇回）、『文芸時代』三巻一号、一九二六・一。

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
拿破崙與輪癬	『文學』一卷一期	黄源	上海	一九三三
拿破崙與田蟲	『黄鐘』四卷八期	開元	杭州	一九三四
拿破崙與癬（待續）	『東方文化月刊』一卷二期	新人	北京	一九三八
拿破崙與頑癬	『中國時報』「人間家庭生活」	劉慕沙	台北	一九七三・一
拿破仑和他的顽癣	『春风译丛』	陈真	潘陽	一九八五
拿破仑与疥癣	『日本新感覚派作品选』作家出版社	高汝鸿	北京	一九八八

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
拿破崙和金錢癬	『春天坐馬車來』桂冠	黄玉燕	台北	二〇〇〇
拿破仑与疥癣	『横光利一文集』作家出版社	高汝鸿	北京	二〇〇一
拿破崙和金錢癬	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇〇七
拿破崙和金錢癬	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇一九

二位、「春は馬車に乗って」（計一〇回）、『女性』一〇巻二号、一九二六・八。

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
春天坐了馬車	『小說月報』二一巻三期	章克標	上海	一九三〇
春天乘著馬車來	『聯合報』「三四面聯合副刊」	劉慕沙	台北	一九七三・一〇・一七～一八
横光利一小说选：春天乘着马车来了	『当代外国文学』三期	唐月梅	南京	一九八三
马车载来了春	『外国文艺』二期	罗传开	上海	一九八四
春天乘著馬車來	『日本新感覚派作品选』作家出版社	耿仁秋	北京	一九八八
春天乘著馬車來	『世界文學大師選第八冊春天乘著馬車來』洪範	劉慕沙	台北	一九九八
春天坐馬車來	『春天坐馬車來』桂冠	黄玉燕	台北	二〇〇〇
春天的马车曲	『横光利一文集』作家出版社	唐月梅	北京	二〇〇一
春天乘著馬車來	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇〇七
春天乘著馬車來	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇一九

三位、「日輪」（計八回）『新小説』二八年五号、一九二三・五。

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
日輪（續第一期）	『大天津』	冉邕	天津	一九四四
横光利一小说选：太阳	『外国文艺』二期	罗传开	上海	一九八四
太阳	『日本新感覚派作品选』作家出版社	罗传开	北京	一九八八
太陽	『春天坐馬車來』桂冠	黄玉燕	台北	二〇〇〇
太阳	『横光利一文集』作家出版社	罗传开	北京	二〇〇一
太陽	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇〇七
太阳	『春天乘著馬車來』吉林大學出版社	商雨虹	長春	二〇〇九
太陽	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇一九

四位、「イタリア行」（計七回）、『東京日日新聞』一九三六・八・八～九。

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
義大利之旅	『雜誌』	朱雪	上海	一九四三
意大利行	『感想与风景』南海出版公司	李振声	海口	一九九八
意大利行	『感想与风景』广西师范大学出版社	李振声	桂林	二〇〇五
意大利行	『文苑』	不明	フフホト	二〇〇九・九
意大利行	『感想与风景』四川文艺出版社	张平	成都	二〇一三
意大利行	『横光利一评论散文集选编』江西人民出版社	王天慧	南昌	二〇一五

四位、「古い筆」（計七回）、『文芸春秋』、七年四号。

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
过去的笔迹	『感想与风景』南海出版公司	李振声	海口	一九九八
过去的笔迹	『課堂内外：高中版（A版）』	不明	重慶	二〇〇五
过去的笔迹	『感想与风景』广西师范大学出版社	李振声	桂林	二〇〇五
过去的笔迹：虫	『散文诗』	李振声	益阳	二〇〇五
过去的笔迹	北京『中华括页文选（高二、高三年級）』	不明	北京	二〇〇九
过去的笔迹	『感想与风景』四川文艺出版社	张平	成都	二〇一三
过去的笔迹	『感想与风景』四川文艺出版社	张平	成都	二〇一五

五位、「花園の思想」（計六回）、『改造』九巻二号、一九二七・二。

タイトル	掲載誌（紙）／図書出版社	訳者	出版地	出版年
花園的思想	『『世界文學大師選第八冊春天乘著馬車來』洪範	劉慕沙	台北	一九九八
花园的思考	『外国文学』	许秋寒	北京	一九九九・四
花园的思考	『横光利一文集』作家出版社	许秋寒	北京	二〇〇一
花園的思想	『春天坐馬車來』桂冠	黄玉燕	台北	二〇〇〇
花園的思考	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇〇七
花園的思考	『春天乘著馬車來』新雨	王海	新北市	二〇一九

五位、「母の茶」(計六回)、『考える葦』、一九三九。

タイトル	掲載誌(紙)／図書出版社	訳者	出版地	出版年
母亲的茶	『感想与风景』南海出版公司	李振声	海口	一九九八
母亲给我留下的茶	『课堂内外：高中版（A版）』	不明	重庆	二〇〇五・一
母亲的茶	『感想与风景』广西师范大学出版社	李振声	桂林	二〇〇五
母亲的茶	『感想与风景』四川文艺出版社	张平	成都	二〇一三
母亲的茶	『感想与风景』四川文艺出版社	张平	成都	二〇一五
母亲的茶	『横光利一评论散文集选编』江西人民出版社	王天慧	南昌	二〇一九

五位「感想と風景」(計六回)、『文芸時代』、二巻一一号、一九二五・一一。

タイトル	掲載誌(紙)／出版社	訳者	出版地	出版年
感想与风景	『感想与风景』南海出版公司	李振声	海口	一九九八
感想与风景	『感想与风景』广西师范大学出版社	李振声	桂林	二〇〇五
屋和墙	『文苑』	不明	フフホト	二〇〇九・一〇
优昙花	『文苑』	不明	フフホト	二〇〇九・一一
感想与风景	『感想与风景』四川文艺出版社	张平	成都	二〇一三
感想与风景	『感想与风景』四川文艺出版社	张平	成都	二〇一五

五回:「笑はれた子」(「被嘲笑的孩子」北京:『新民報半月刊』五巻二〇期、呂品、一九四三。「被嘲笑的孩子」台北:『中國時報』四二版人間版、李永熾、一九八六。「被取笑的孩子」『春天坐馬車來』台北:桂冠、黄玉燕、二〇〇〇・一一・二二。「被嘲笑的男孩」大連:『日语知识』二〇〇三・四、李炜、二〇〇三。「被嘲笑的孩子」『春天乘著馬車來』新北市:新雨、王海、二〇〇七。「被嘲笑的孩子」『春天乘著馬車來』新北市:新雨、王海、二〇一九。)、「赤い着物」(原題「赤い色」)(「紅色」北京:『日语学习与研究』一九九〇・四、訳者不明、一九九〇。「紅衣服」台北:『中央日報』二二面中央副刊、訳者不明、二〇〇〇・四・一九。「紅衣服」『春天坐馬車來』台北:桂冠、黄玉燕、二〇〇〇。「紅衣裳」『春天乘著馬車來』新雨、新北市:王海、二〇〇七。「紅衣裳」『春天乘著馬車來』新北市:新雨、王海、二〇一九。)、「頭ならびに腹」(「头与腹」『日本新感覚派作品选』北京:作家出版社、罗传开、一九八八。「脳袋和肚子」北京:『日语学习与研究』一九九二・四、任犹龙、一九九二。「脳袋和肚子」台北:『中央日報』二二面中央副刊、黄玉燕、二〇〇〇・六・二二。「脳袋和肚子」『春天坐馬車來』台北:桂冠、黄玉燕、二〇〇〇。「头与腹」『横光利一文集』北京:作家出版社、唐月梅、二〇〇一。「头与腹」『苍蝇』長春:吉林大学出版社、商雨虹、二〇〇九。)、「日記」(原文初出『経済往来』八巻八号、一九三三・八。「日記」フフホト:『文苑』二〇〇九・一、訳者不明、「宝」(「宝贝儿」『横光利一文集』北京:作家出版社、二〇〇一。「宝貝」『春天坐馬車來』台北:桂冠、黄玉燕、二〇〇〇。)、「寝園」(「寝園」台北:十月出版社、周弦、一九六九。「寝园」北京:作家出版社、卞铁坚、二〇〇一)、「婦德」(「妇德」『横光利一文集』北京:作家出版社、许秋寒、二〇〇一)、「時間」(「时间」北京『外国文学』许秋寒、一九九九・四。「时间」『横光利一文集』北京:作家出版社、许秋寒、二〇〇一)、「マルクスの審判」(「馬克斯的審判」上海:『文藝月刊』六巻四期、易焯、一九三四。「馬克斯的審判」『春天坐馬車來』台北:桂冠、黄玉燕、二〇〇〇。)、「幸福の散布」(「播种幸福」北京:『外国文学』、许秋寒、一九九九・四。「播种幸福」『横光利一文集』北京:作家出版社、許秋寒、二〇〇一)。他、ABに収録する作品:「人間の研究」。CDに収録する作品:「名稱について」、「急所について」、「銀座について」、「作家と家について」、「春になって」、「先づ長さを」、「作文」、「冬彦抄」、「チップその他」、「日記(『書方草紙』収録)」、「枕」、「懐疑

二〇〇九・一、訳者不明、二〇〇九・一。「日记」『感想与风景』海口:南海出版公司、李振声、一九九八。「日记」『感想与风景』桂林:广西师范大学出版社、李振声、二〇〇五。「日记」『感想与风景』成都:四川文艺出版社、張平、二〇一三。「日记」『感想与风景』四川文艺出版社、成都:张平、二〇一五。)他に、ABCDEに収録する作品:「大阪と東京」、「私の生活」、「外国語」、「雑感(『覚書』収録)」、「欧洲紀行」、「ハンガリア行」、「作家の秘密」。「納涼」(「納涼」(「夏日小品—納涼」上海:『雑誌』、壬、一九四四。ABCD)

四回:「上海」(「妇人」、南京:『矛盾月刊』二巻五期、郭建英、一九三四。「上海」上海:『中華週報』六期、楊之華、一九四二。『上海故事』瀋陽:辽宁教育出版社、滕忠汉等、一九九三。「上海(連載一)」合肥:『科教文汇』李振声、二〇〇四・九)、「祕色」(「祕色」『譯叢』一巻五期、訳者不明、一九四一。『横光利一文集』北京:作家出版社、许秋寒、二〇〇一。『感想与风景』成都:四川文艺出版社、張平、二〇一三。『感想与风景』四川文艺出版社、张平、二〇一五)。他、ABCDに収録する作品:「海の草」、「日記」、「古い筆」、「雑感(『覚書』収録)」、「大阪と東京」、「灘にゐたころ」、「季節」、「琵琶湖」、「スキス行」、「梅雨」、「勝負」、「着物と心」、「夢もろもろ」。

三回:「火」(「火」、『春天坐馬車來』台北:桂冠、黄玉燕、二〇〇〇。「火」『春天乘着馬車來』新北市:新雨、王海、二〇〇七。「火」、『春天乘著馬車來』新北市:新雨、王海、二〇〇九。)。「静安寺の碑文」(「你一定要去见识见识上海」『书城』四期、一九九八。AB)他に、CDEに収録する作品:「旅」、「夏にでもなれば」、「オリンピック記」、「オリンピック開会式」、「我等と日本」、「北京と巴里」、「考える葦」。

二回:「宝」(「宝贝儿」『横光利一文集』北京:作家出版社、二〇〇一。「宝貝」『春天坐馬車來』台北:桂冠、黄玉燕、二〇〇〇。)、「寝園」(「寝園」台北:十月出版社、周弦、一九六九。「寝园」北京:作家出版社、卞铁坚、二〇〇一)、「婦德」(「妇德」『横光利一文集』北京:作家出版社、许秋寒、二〇〇一)、「時間」(「时间」北京『外国文学』许秋寒、一九九九・四。「时间」『横光利一文集』北京:作家出版社、许秋寒、二〇〇一)、「マルクスの審判」(「馬克斯的審判」上海:『文藝月刊』六巻四期、易焯、一九三四。「馬克斯的審判」『春天坐馬車來』台北:桂冠、黄玉燕、二〇〇〇。)、「幸福の散布」(「播种幸福」北京:『外国文学』、许秋寒、一九九九・四。「播种幸福」『横光利一文集』北京:作家出版社、許秋寒、二〇〇一)。他、ABに収録する作品:「人間の研究」。CDに収録する作品:「名稱について」、「急所について」、「銀座について」、「作家と家について」、「春になって」、「先づ長さを」、「作文」、「冬彦抄」、「チップその他」、「日記(『書方草紙』収録)」、「枕」、「懐疑

と象徴」、「野原」、「趣味生活」、「おあづけ」、「巴里から帰つて」、「動揺の限界」、「希望について」、「年頭の感」、「伊賀のこと」、「どんな風に発展するか」、「旅中寸感」、「着物」、「巴里と東京」、「十五夜」、「春の瀬戸」、「わが郷土讃」、「ある夜」。

一回：『蛾はどこにでもいる』（『到處有的蛾』上海：『東方雑誌』二六巻二四期、章克標、一九二九）、『新郎の感想』（『新郎的感想』上海：水沫書店、郭建英、一九二九）『名月』（『明月』台北：『聯合報聯合副刊』八面、黄玉燕、一九八一：一一：三〇）、『春』（『春』上海『現代』三巻六期、高明、一九三三）、『芋』（『山芋』天津：『北調』二巻二期、蘅淑、一九三五）、『歴史（はるびん記）』（『歴史（哈爾濱記）』武昌：『中興週刊』五巻二二期、懐雲、一九三五。『歴史（哈爾濱記）（續）』武昌：『中興週刊』五巻二三期、懐雲、一九三五°）、『紋章』（『家徽』北京：作家出版社、朱春育・馬文香、二〇〇一°）、『秋』（『秋』上海：『日本評論』三巻一〇期、訳者不明、一九四二）、『川端氏の芸術』（上海『經綸月刊』二巻四期、荻崖、一九四二）、『園』（『園』上海：『太平洋月刊』四巻七期、訳者不明、一九三七）、『街の底』（『街之底』上海『文学週報』三〇一～三二五期、訳者不明、一九二八）、『時代と精神』（『時代與精神』『文藝月刊』一〇巻三期、張夢尼、一九三七）、『静かなる羅列』（『毀滅』上海：『国风』一巻三期、史光照、一九三九）、『舟』（『Climax』『新東方雑誌』、不明、一九四一）、『言語と文章』（『言語與文章』上海：『新學生』五期、訳者不明、一九四二）。他に『E』に収録する作品：『印象』、『時代は放蕩する』、『新しき三つの焦点』、『最も感謝した批評』、『黙示のページ』、『自己紹介』、『客観描写』、『嘘の原稿』、『十月の文壇』、『新しい馬鹿』、『新らしい生活と文学と所有』、『文芸時評』、『イプセンの戯曲』、『模倣者の活動』、『編集中記』、『菊池寛と新感覚派』、『俳優の劇評』、『形式と思想』、『文芸時評（『読売新聞』一九二九・三・一五）』、『始めの事について』、『女性と認識と』、『中本たか子氏について』、『池谷信三郎氏』、『作者の言葉―『寝園』』、『モダン・反モダン』、『心理主義文学と科学』、『当時』、『早春』、『小説と時間』、『ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』』、『文学への道』、『作者の言葉―『時計』』、『雑感―異変・文学と生命』、『宮沢賢治氏について』、『歴史小説と作家』、『作者の言葉―『盛装』』、『作者の言葉―『家族会議』』、『現代の青年』、『紋章について』、『新感覚派文学の研究』、『散文の精神』、『覚書』（『考える葦』収録）[5]。

二　最も翻訳された小説と、中国語の同時代評から見る横光

以下では、最も翻訳された小説上位五位の中国語の同時代評を通して、横光がどのように受容されたかを紹介する。まず、一位「蠅」について、中国では、一九四〇年に、許穎が

「四十年来日本の文筆家：当代で最も声望が崇高な作家横光利一」で、「斬新なスタイルで、多才な文才と清新で溌剌とした姿勢が、当時の沈滞の雰囲気を一掃した」[6]と評した。雷定平は一九八三年に「蠅」の訳と共に、作品を「作者の青年期の代表作」[7]として紹介した。また、郭玉洁は二〇〇七年に「横光利一短編小説『蠅』」では、「『蠅』以降の作品は、技法が更に成熟し、構図性、偶然性、象徴性などの特徴がより顕著になった。なおかつ、彼の文章にはいつも悲観的な情緒が漂い、彼は自分の作品で一種の人生の価値を表現しようとしている」[8]と批評した。いずれも出発期の代表作として認識している。

二位の「ナポレオンと田虫」について、最初の訳者の黄源は、劉吶鷗と同時期に上海で活動した翻訳家で、一九三三年「ナポレオンと田虫」の訳後記で、劉とやや異なる趣旨で以下のように横光を紹介した。

彼の親友の藤森淳三はかつてこのように評したことがある。「横光利一は頑固な田舎者だ。彼の作品には、多くが都会を描くものが多いが、彼の本質は、都会的というより、農村的だ。彼もまたまさに田舎者だからこそ、「新感覚派」の主将となりえた。彼は不撓不屈で、臥薪嘗胆で十年の苦労をかけた。」……日本新感覚派はもともとフランスのポール・モーラン（Paul Morand）の名著『夜開く』（Open All Night）の影響を受けて発生した。……昔の写実主義の描写は、いったん彼のものと比較すると、平面的であり、説明的になってしまう。逆に、彼の描写は立体的であるのだ。彼の文章には感覚の香りが横溢し、これを以って、「感覚派」の詩意の豊かさを示し、「新浪漫派」の作品と比べても、近代の感覚をより有している。彼は動的な現実の状況の力ある欲求を立体的に描くことを重視し、混沌とした幻影のような現代文明を肯定し、賛美している。……だから翻訳しようとすると、困難である。この作品は『新進傑作小説全集』の『横光利一集』から訳した。……謝六逸先生はこれをこよなく好んでいる。……そこで、訳してからは彼に校閲をして頂いたことを、ここに記して感謝を述べる。[9]

引用中の藤森の話の出典は不明だが、田舎者の根性によって、都会や近代文明を立体的に描ける「新感覚派」を立ち上げた、と横光の本質を分析した。劉たち一派による、日本新感覚派を、都会風俗のみを描く新興芸術派と混同するような、[10]宣伝とは異なる。言い換えれば、横光の受容初期には、まだ複数の理解が存在していたのである。

ところが、彭小妍『海上説情慾：從張資平到劉吶鷗』[11]、李歐梵『上海摩登』[12]、史書美『現代的誘惑』[13]など中国新感覚派研究の重要な先行研究が、モダニティの表現と都市近代の退

廃的風俗描写を中心に分析したことにより、中国文学の研究史では、劉の一派が都会文学に属すという評価が定着し、それに伴い、横光を含む日本新感覚派があたかも都会しか描かない流派であるかのような認識を生み出した。

『劉吶鷗全集』の編集者の許秦蓁が、劉の研究から出発し、同じく、多数の影響源を持つ日本新感覚派を、特にポール・モーランとの関係を重視して紹介しているのも、一九三三年の黄源と、上記の先行研究の延長線上にある。

同じく二位に同列の「春は馬車に乗って」について。多くは、中国では、前掲した一九四〇年の許穎の評論では、「病人と世話人の間の不同調な気持ちを詳細に描く。『花園の思想』、『蛾はどこにでもゐる』はこの作品の続編のようで、全て愛妻死亡前後の心理変化となる」[11]と読まれている。一九九一年の杨晓文は「ウマを乗り回し、弓を引き絞ってわざと放たない：横光利一の『春は馬車に乗って』解析」では、この作品を発表してから「創作スタイルが日に日に変化し、依然として芸術の革新に拘るのみならず、作品の内容と含蓄も重視しはじめた」[15]と評し、その結末が最も素晴らしく、「雰囲気の美を醸し出すのに成功。……タイトルの意味を浮き彫りにしている」[16]と高く評価している。

一方、台湾では、これが最も流通している訳本のタイトル同名作となる。その中で、二〇〇〇年刊行の黄玉燕訳の『春天坐馬車來』に、詳しい解説「横光利一の文学世界」が付録されている。この作品を「新感覚派時期の頂点の成功作」[17]だといい、「殆ど事実に近い写実である。男主人公は病中の妻に難癖をつけられても、忍耐強く愛妻の看病をする。物語の内容は読者に肯定されているが、やはり暗くて悲しい」[18]と解説している。

二〇一九年、新雨出版が王海訳『春天乘著馬車來』を再版した。筆者は、同書の推薦文「推薦序　東アジアモダニズムの旗手横光利一」に主に横光の文体変遷を四期に分けて、新感覚派時代の病妻もので、結核文学の傑作として紹介した。[19]前述した許秦蓁による解説もある。許は、劉がその同人誌『無軌列車』第四期に「ポール・モーラン特集」を発行し、Benjamin Cremieuxの「ポール・モーラン論」[20]を翻訳したことを根拠に、ポール・モーランと横光利一と劉を「感官・感覚主義」を重視する一脈だ[21]と論じ、中国文学研究の先行研究を踏まえて横光を紹介している。このように、日本文学の研究史とは異なる、中国文学の研究史に基づく横光受容の様相が伺える。

この作品は台湾では教材としても使われ、黄錦容は「本文読みの分析と統合—横光利一『春は馬車に乗って』を読む—」を発表し、「死を目の前に控えた心理的変化、二人の死と苦痛に対する態度、また夫婦の間の悲情を私小説を避けて、描

いた作品」[22]で、学生たちと「新感覚派的手法が、愛と死という人間の根源的な問題を扱うときにも可能か」[23]を探求したと報告している。

三位の『日輪』に関しては、七類達は「横光利一の変貌（下）—現代日本青年作家論（三）」で、「『日輪』から『旅愁』の二十年近くの作家生活において、彼がいくたび変貌し、発展してきたか分らない」[24]と「日輪」と以降の作風の相異を説明する。前掲した、「四十年来日本文筆人：当代声望最為崇高的作家横光利一」では、「作者が好む特別な人物と特別な物語」[25]として、「ナポレオンと田虫」とともに挙げられた。戦後の訳者李振声も「一九二三年菊池寛が作った『文芸春秋』に参加し、『蠅』と『日輪』を発表し、文学界の注目を浴びた」[26]と出世作として紹介した。台湾では、黄玉燕が、「横光利一的文學世界」で「着目点が巧妙で、モチーフが独特で、横光利一が創作初期において、自然主義と峻別する華麗な文体を表現している」[27]と高く評価している。

四位は「イタリア行」と「古い筆」で、意外と随筆も多く訳された。同時代評は見当たらないが、前者は七回の内、五回、後者は七回の内、四回、中国で流通している異なる随筆アンソロジーに収録されたもので、横光の随筆が、台湾よりも、中国でよく読まれていることをもの語っている。

五位は、「花園の思想」と「母の茶」、「感想と風景」。「花園の思想」の訳は、すべて戦後の訳で、しかも『春は馬車に乗って』と題した選集に五回も収録されている。

台湾では、前掲した黄玉燕の解説があり、「花園の思想」は「同工異曲で、病魔と闘う物語で、……内容の雰囲気は前の作品（訳注：「春は馬車に乗って」）よりも明朗で、建設性を備えている。」[28]と横光の生死観の闊達さを称賛した。

「母の茶」、「感想と風景」は、四位と同様の理由で流通しているだろう。二〇〇五年に、「母の茶」の訳文とともに、その読みどころを「母親に関する記憶は、いつも温かく心を動かすもので、決して小さな茶碗の中にだけ存在していないだろう。」[29]という紹介もされている。

他に、上位には入らなかったが、四回訳された「上海」については、最も当時の日中関係と関連させて、述べられているので、併せて紹介しておく。例えば、七類達は「横光利一の変貌（下）—現代日本青年作家論（三）」では、以下のように述べている。

「上海」は彼の新感覚派時代の最後のもので、……今日「上海」を読み返すと、しみじみと感じるのは、登場人物の陰影と作者の表現形式ではなく、「東洋の運命」という言葉に尽きる。「上海」に登場した何人かの中国人と日本人たちは、今どういった生活を送っているのだろうか。マルクス主義の嵐が狂乱に吹く一時代前の上海で、横光

は伝統というものをどう考えているのだろうか。[30]

また、七類達は「日輪」から「旅愁」の変貌を説明するために、横光が穆時英との対面を追憶する「穆時英氏の死」(『文学界』、一九四〇・九)で、横光が述べた「新感覚派の当時は、いつもわれわれ感覚派は悟性活動を中心に進むべきであると主張したので、感覚を第二としてゐた當時の私の構想を、どんなに穆氏に説明したものかと暫くは戸迷ひを感じた[31]」という一文まで引用し、日中読者の横光についての認識の違いを示唆している。七類達という評者の詳細は不明だが、日本語の構文を意識していた中国語表現という特徴から、日本語も堪能で、日本文学の現状を熟知する人物だと思われる。

更に、二年後、楊之華による訳「上海―『支那紀行』より訳す[32]」を刊行するに当たり、訳者の言葉が付記されている。

「横光利一」という名前を日本で知らない人はいない。たとえ私たち中国の翻訳文学界においても、すでに定評のある人物である。劉吶鷗、黄源などが、次々と彼の小説を中国に紹介してきた。総じていえば、横光氏の作品は、現代資本主義社会での腐敗期の不健全な生活を描いている。……そのスタイルは、常に抒情詩の香りと近代の明快感を帯びている。……このスケッチは、横光氏が一昨年日本軍部の招聘で、中国の前線と長江当たりを視察し、帰国後の作品で、後に東京第一書房版の『支那紀行』という本に収録された。……このRomanceテイストの物語には、愛国の思想が滲み出ている。その国の人々の愛情の励みに資する。……横光氏の作品を愛好する読者は、ここで少し精神的な癒しを得られるだろう。[33]

この訳者は、木村毅編『支那紀行』(第一書房、一九四〇)に収録された一九二八年訪問後の作品である『上海』を、一九三六年『東京日日新聞』に依頼され、ヨーロッパ行きの途中に上海に上陸し、魯迅とも会った時の作品だと誤解している。また、この訳者の認識は、日本文学史の流れというより、筆者がかつて分析した、劉吶鷗がその翻訳と創作により行った「書き換え[34]」に則っていることが分る。この訳者と、王洋が推論した、『上海』の「芳秋蘭」のモデルと思われる「中共中央婦女部の部長向警予の助手[35]」である楊之華とが同一人物かどうかは、今後の研究を待つ。

総じていえば、これまで、中国による受容を主に、劉吶鷗一派の上海新感覚派を中心に検討してきたが、実際、今回の調査により、北京など上海以外の地域でも、劉らの言説が広がり、劉の影響下にあることが分る。

一九三四年には、既に鄭康伯が「「横光利一」在中国」で、「ある時期に、吾々の文壇には、こうした美談が広がっていた。劉吶鷗は「第二の横光利一」、穆時英は「第三の横光利一」、そして、優れた新進の黒嬰は「第四の横光利一」といわれている[36]」と劉の言説に同調し、その系譜作りの一翼を担っていた。

さらに、一九三六～一九三九年には、この系譜を援用するメディアが存在した。著者不明の「孟嘗君再来：第二の横光利一の劉吶鷗[37]」、康の「第三の横光利一の穆時英の苦悶：奥さん仇珮珮を失われて、また読者たちに罵倒される[38]」、康「孟嘗君再来の第二の横光利一：劉吶鷗が喜怒常なし。楊邨人曰く…「友情が足りない」！[39]」、清鳳「黒嬰：第三の横光利一[40]」などである。彼らの存在は、この系譜が承認され、広まっていたことを物語っている。タイトルでは食客三千人を養った孟嘗君に劉をたとえ、「小孟嘗」のあだ名によって、彼が一派を立ち上げた劉のリーダーシップを示唆している。これらの批評の内容は、四人の文体の継承関係を説明し、それぞれの性格をスクープ誌風に脚色している。鄭康伯が続いて彼らを批評する。

穆時英……彼の文字は、……「艶麗さにいささか飽きが来る」。……「公墓」に収録された諸編は現代の都市味を帯び、その題材の領域は狭く、彼の作品に表現されるのは殆どダンスホールの生活、或いは、「早春の蜜味を帯びたロマンス」である。……黒嬰という南方の健勝な青年は、その作風において穆時英からの多大な影響を直接受けている。しかし、その描写背景の多くは南島一帯の風景に属している。……彼は永遠にこの「舞」の範疇に止まり、その文字も永遠にこの範疇に止まっている。彼ら三人には一つ共通点があり、その構文は殆ど美の言葉の組み合わせである。穆がこの習性に最も深く染まり、その比較的整った字句を選び繋げれば、一編の「象徴派の詩」とすることができる。……彼らは多少危険性を帯びた人間で、もし大衆語が実現でき、文字の欧化が打ちのめされば、彼らこそが最初にこの悪運を延続する人々だと私は思う。[41]

ここで述べられる第三代の穆時英の研究は、鈴木将久『上海モダニズム』(東方書店、二〇一二・四)、『中国モダニズム文学の世界―一九二〇、三〇年代上海のリアリティ』(勉誠出版、二〇一四・四)、福長悠「穆時英におけるモダン都市の性愛と堀口大學:「南北極」および「被當作消遣品的男子」を中心に」(『日本中國學會報』二〇一八・一〇)など、既に多く研究されているが、第四代の黒嬰は、まだ十分に研究されておらず、今後の研究を待つ状態である。彼の本名は張炳文、また張又君ともいう。一九一五年インドネシア生まれ。原籍は広東省梅県。七歳に梅県で就学、十三歳でまたインドネシアへ戻った。一九三二年に再び中国の暨南大学英文科に入学。一九三三年中国語小説集『帝國的女兒』などを出版。一九四二年、インドネシアに戻り、『新中華報』などの編集

長を務めるが、インドネシアの排華運動により、一九五一年に中国に定居した華僑である。[12]

他に、戦前の読者の受容[13]として、エリート校の燕京大学の学生新聞『燕大週刊』には、利三「横光利二語録（一）」[14]や利三「横光利二語録：問：先生は第一回全員大会についてどのような印象をお持ちでしょうか」[15]などで、「横光利二」や「利三」などのペンネームによるパロディが登場している。横光が中国の知識青年の文学典範として尊崇されていることを物語る。しかも、後者の号の「編集小言」では、「一般的言論は、当事者の破壊を受け、また華北では、日本の帝国主義からの直接の圧迫を受けている。大衆の呼び声は既に聞こえなくなった。……我々の『燕大週刊』は……その積極的な任務を背負うべきだ」[16]という時代背景にあったにも関わらず、横光を架空の校内の大先生に脚色したほどの人気ぶりである。

一方、横光の都市小説の開祖という側面とは別に、横光の思想に注目する戦前の評者もいた。陶之の「横光利一の紹介—現代日本作家研究その一」では、中国知識人林語堂が*My Country and My People*[17]で中国青年の知識体系の混乱を述べたことを引用し、以下のように横光文学を理解っしている。

「新と旧」、「欧米的と日本的」の間の断層が日本の知性生活の混乱を引き起し、……この現象を文学作品に浮き彫りにしたのは、日本ではまず横光利一の小説を取り上げるべきだ。横光利一という作家は、中国ではより親しまれる方で、彼の経歴は紹介されたこともあれば、彼の作品も翻訳されている。……だから、彼の小説の世界は、同じく知識の混乱生活を送っている中国青年には近いのだ。[18]

次に、羅烽「横光利一先生を記す」は大東亜文学者大会に臨み、横光が日本作家を代表して行ったスピーチから受けた印象を記した。

中日事変が起きてまもない時期に、かつて上海に来て、四馬路都城飯店ビルに泊まった。彼はこういった真摯な幻想を持っている。もし機会があれば、このビルに千名の日本青年と、千名の中国青年をここに集め、彼らに非常に腹割って中日問題を議論させれば、いい結果論を得られるかもしれない。せめて、更に深い誤解によって、喧嘩になることはないはずだ。[19]

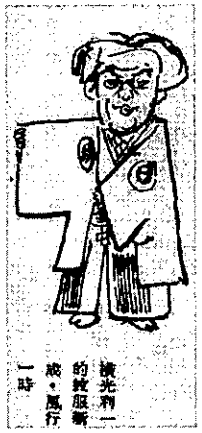
更に、一九三七年張夢尼が「時代と精神」の訳後、次のような感想を述べている。

帝国主義の暴君が防衛薄弱なわが国に進攻し、我が全民族が骨に染みるほどの痛みを蒙っている。……この異常に不安な東アジアにおける我らは、これを読んでどんな感想があるか？……我ら東アジア人類の覚醒は、一つの極悲惨な創傷を経なければならないのか。……また、原

作は現在の日本では痛快に述べられないので、文字がかなり晦渋である。これを訳す時には、原作の精神を失われないよう努力した。[20]

何れも、横光による日中や東アジアの情勢についての発言を重視している同時代評である。

最後に、漫画による横光の近況紹介（左絵参照）も目立ち、中国を風靡した横光像が浮き彫りにされている。図一「世界文壇の漫画巡礼：日本：横光利一が紋服を新調。一時を風靡した」[21]、図二「オリンピックで活躍している三人の日本作家、武者小路、横光利一」[22]。



図一

図二

三　重要な訳者たち——郭建英、李振聲、許秋寒、黄玉燕、劉慕沙、王海

今回の調査結果に基づき、何名か重要な翻訳者を紹介する。[23]

まず郭建英（一九〇五～一九七九）は、中國駐日書記官郭左淇と日本人の母に生を受けた。東京麹町尋常小学校卒業後、上海澄衷中学、聖ヨハネ大学に入学した。姉の郭佩雲が、劉吶鷗の台湾台南塩水公学校の同級生の黄朝琴と結婚し、共に一九二五年に上海に渡った。このような縁で劉の文芸同人となった。[24]一九三一～一九三五年『現代』『婦人画報』『文芸画報』『小説』などの雑誌に挿絵や漫画を描き、彼の漫画では「現代女性の模型」「都会の誘惑」などが有名である。前者の説明書き「Nonsensical（内容がない）な脳細胞'Grotesque（奇怪で目立つ）の乗り移り、Erotique（肉感）の下半身、原動力はお金とHormone（生殖元素）、It（熱）は彼女の生活武器だ」[25]は劉のイメージ作りと同調し、中国での横光の翻訳受容のムードメーカーとしても活躍していた。

李振聲（一九五七～）は中国無錫出身。日本信州大学人文部、復旦大学中文系教授。訳著には、漱石の『夢十夜』『虞美人草』などがある。[26]

許秋寒に関しては、「花園的思考」訳文の最後に、北京言

語文化大学に所属と記されている。[57] また、葉渭渠主編、唐月梅、宋喜副主編、千葉宣一編集顧問の『横光利一文集』全四冊（作家出版社、二〇〇一・一）[58] では最も翻訳した作品数が多い。

なお、戦後の訳者に関しては、中国では李振声、張平が訳した『感想と風景』を題にした随筆アンソロジーの翻訳はいずれも再版され、戦後に掲載された翻訳は、多くがその訳の転載であるため、大きな貢献をしたと言える。

そして、台湾においては、戦前は日本語圏内であったため、翻訳を介さずに受容された。戦前の日本語教育を受けた者が、戦後の訳者になった。

まず、黄玉燕（一九三四～二〇一七）。日本統治下台湾生まれの黄は、公学校で四年間日本語教育を受け、その後、国民党政権下で中国語教育を受けた。夏目漱石、森鴎外、福沢諭吉、川端康成、三島由紀夫、大江健三郎、村上春樹、吉本ばなな、遠藤周作、伊集院静、高樹のぶ子など八〇余名の日本作家の作品を翻訳した。一九九三年に『日本名家小説選』（台北：聯経）で台湾の「中國文協文芸奨章文学翻訳奨」を受賞した。また、日本統治下台湾の重要な日本語文学、例えば、呉濁流『アジアの孤兒』、西川満『台湾縦貫鉄道』や、戦前作家の『王昶雄全集』制作への貢献が大きい。[59]

劉慕沙（一九三五～二〇一七）は、台湾戦後の重要作家朱西甯の妻、作家朱天文（映画監督の侯孝賢の脚本家）、朱天心、朱天衣の母親で、翻訳家・作家である。横光のほか、川端康成、三島由紀夫、石川達三、曾野綾子、井上靖、大江健三郎、吉本ばなな、松浦理英子等の作品など六〇余冊[60]を翻訳した。戦後台湾の文学に貢献の大きい家族である。

王雨については、「日本語学科出身。日本語編集の仕事を経て、日本語の文学や歴史分野に酔心し、……訳著多数[61]」と記され、出版社によると、中国四川外国語学院卒業生である。台湾の出版社が中国の訳者の翻訳を購入し、出版する例は他の日本文学の翻訳では珍しくない。

六　おわりに

上記の「表一」の調査結果から、最も翻訳される理由が同時代評によるものだったこと、また当時の横光に対する認識の特徴が四点挙げられる。まずは、戦前、中国では、横光が確かに文学典範として尊崇され、模倣者が多数見受けられること。二点目は、日中関係や東アジアについての論述や作品もよく翻訳され、[62] その観点が重視されていたこと。三点目は、中国では、戦前、小説が遥かに随筆より多く翻訳されたが、戦後は、中国では『感想と風景』や『横光利一评论散文集选編』という随筆アンソロジーが五種類もあり、新聞雑誌による転載が、小説の翻訳よりも流通していること。これらの随

筆集の翻訳の影響が大きい。四点目、台湾では、『春は馬車に乗って』を題した翻訳小説集が五種類もあり、「蝿」、「春は馬車に乗って」、「花園の思想」がいずれにも収録され、最も読まれている作品群だということである。（敬称略）

---

(1) 『色情文化』（上海：水沫書店、一九二八・九）。原文「譯者在這兒不得不另說一聲的就是這裡所譯幾個人的文章。他們的文章是不是屬于正統的日本文的。他們的文章是根據于現代日本的生活而新創出來的。……但是在明敏的讀者看起來、對於他們不但不感覺難澀、反而覺得他們新鋭而且生動可愛」。

(2) 一九三四年に郟康伯が「『横光利一』在中國」（上海：『社會周報』一巻二八期、一九三四、五五〇頁）で、「有一個時期、我們的文壇會傳出了這樣的一段嘉話：是說劉吶鷗是『横光利一第二』、穆時英是『横光利一第三』、而後起之秀的黑嬰是『横光利一第四』」（ある時期に、吾々の文壇には、こうした美談が広がっていた。劉吶鷗は「第二の横光利一」、穆時英は「第三の横光利一」、そして、優れた新進の黒嬰は「第四の横光利一」といわれている）と述べた。

(3) 謝恵貞『日本統治期台湾文化人による新感覚派の受容――横光利一と楊逵・巫永福・翁鬧・劉吶鷗』（東京大学大学院博士論文、二〇一二・九）を参照。

(4) なお、再版に関しては、流通、修訂があることから考えて、異なるバージョンと見なし、再版ごとに回数を重ねて計算する。なお、劉吶鷗訳『色情文化』に収録されている「七階の運動」の訳は、検索結果には出てこなかった。データーベースの検索システムがまだ完備されていないことを示唆しているが、現時点での検索結果で、翻訳の傾向、その中国語の読者による評価を理解すると考えれば、意義のある検証だと言えよう。

(5) 「印象」から「編集中記」は『横光利一全集』一四巻（河出書房新社、一九八二・一二）のほぼ目次順に選ばれたものである。他に原典を特定できないのは以下のものである。今後の課題とする。「一種風景（ある風景）」（フフホト：『文苑』二期、訳者不明、二〇一三）、Eに収録する「汽车、自行车和感觉派」、「斎藤龙太郎论」、「写给中村星湖」、「文学展望」、「留存之印象」。

(6) 許穎「四十年来日本文筆人：當代聲望最為崇高的作家横光利一」（大阪：『華文大阪毎日』四巻九期、一九四〇年）三六頁。『華文大阪毎日』は、一九三八年一一月から一九四三年一二月まで、大阪毎日新聞社が編集、東京日日新聞社が中国の日本占領区で発行する日本軍の対中思想戦に使われた新聞である。施淑「大東亞文學共榮圈――《華文大阪毎日》與日本在華占領區的文學統制」（台北：『新地文学』一巻一号、二〇〇七・九）四二～四四頁による。

(7) 雷定平「蝇」（北京：『日语学习与研究』一九八三・三）五四頁。原文「作者的青年期的代表作」。

(8) 郭玉洁「横光利一短篇小説《蝇》」（合肥：『安徽文学』一〇期、

二〇〇七・七）四五頁。原文「在《蝇》之后的作品中，随着技巧的更加娴熟，构图性、偶然性、象征性等特征得到更明显的体现。并且，他的文章中总是流露着一种悲观的情绪，他在自己的作品中试图体现一种人生的价值」。

(9) 黄源「拿破仑与轮癣」（上海：『文学』一卷一期、一九三三）八六～八七頁。原文「他的好友藤森淳三曾有過這樣的評語：「横光利一是個頑固的鄉下人。他的作品中雖有許多是寫都會的，但他的本質，與其說是都會的，不如說是農村的，他也正因為是鄉下人，才得為『新感覚派』中主將。他不撓不屈，臥薪嘗膽的用了十年苦功。……日本的新感覚派，本來是受了法國保羅・穆航（Paul Morand）的名著不夜天（Open All Night）の影響而發端的。……從前的寫實主義的描寫，一與他的相比，便顯得是平面的，說明的了，反之，他的描寫是立體的。他的文章横溢著感覚的香味，以表示「感覚派」的詩意的豐富，那比「新浪漫派」的作品也顯得更有近代的感覚，他很重視立體的描寫動的現實情形之有力的慾求，與對於渾沌的幻影似的現代文明之肯定並讚美。……所以要翻譯，卻很困難。本篇是從『新進傑作小說全集』之横光利一集中翻譯出來的，……謝六逸先生極愛是篇，……因此我在這篇譯成後，曾請他校閲一次，特此誌謝」。

(10) 謝惠貞「中国新感覚派の誕生――劉吶鷗による横光利一作品の翻訳と模作創造」（『東方学』一二一輯、二〇一一・一）一二七頁。

(11) 台北：中国文哲研究所籌備處、二〇〇一・一。

(12) 南京：江蘇人民出版社、二〇〇七・四。

(13) 北京：北京大学出版社、二〇〇五・一二。

(14) 許穎「四十年来日本文筆人：當代聲望最為崇高的作家横光利一」（大阪：『華文大阪每日』四卷九期、一九四〇）三七頁。

(15) 杨晓文「盘马弯弓惜不发：横光利一的《春天乘着马车来》赏析」（北京：『日语学习与研究』一期、一九九一）六五頁。原文「《春天乘着马车》问世之后，他的创作风格日见变化，不仅仍执意艺术鼎新，而且也注重起作品的内涵、蕴藉」。

(16) （北京：『日语学习与研究』一期、一九九一）六六頁。原文「意境美的成功造设。……画龙点「题」」。

(17) 黄玉燕「横光利一的文學世界（黄玉燕訳『春天坐馬車來』台北：桂冠、二〇〇〇・一一）九頁。原文「新感覚派時期頂點的成功作品」。

(18) 黄玉燕「横光利一的文學世界」（黄玉燕訳『春天坐馬車來』台北：桂冠、二〇〇〇・一一）一〇頁。原文「幾乎是接近事實的寫實，男主角雖然受到病中妻子的百般挑剔，仍然忍受艱難照顧愛妻，故事內容雖然受讀者肯定，但陰暗，悲傷」。

(19) 謝惠貞「推薦序 東亞現代主義的旗手横光利一」（王海訳『春天乘著馬車來（新版）』，新北市：新雨、二〇一九・二）二九九～三〇二頁。

(20) Benjamin Crémieux著、劉吶鷗訳「保爾・穆杭論」（上海：『無軌列車』四期、一九二八・一〇）一六〇～一六一頁。（横光利一著、王海訳『春天乘著馬車來（新版）』，新北市：新雨、二〇一九・二）六～一〇頁。

(21) 許秦蓁「導讀 亂世亂離中的「感覚」盛宴」（王海訳『春天乘著馬車來（新版）』，新北市：新雨、二〇一九・二）四～七頁。

(22) 黄錦容「本文読みの分析と統合―横光利一『春は馬車に乗って』を読む」（台北：『政大日本研究』創刊号、二〇〇四・一）二〇七頁。

(23) 黄錦容「本文読みの分析と統合―横光利一『春は馬車に乗って』を読む」（台北：『政大日本研究』創刊号、二〇〇四・一）二〇七頁。

(24) 七類達「横光利一的變貌（下）―現代日本青年作家論（三）」（漢口：『新生半月刊』、二卷二〇期、一九四〇）一七頁。原文「在從「日輪」到「旅愁」的近二十年的作家生活中，他不知道蜕變了多少回，並且發展著」。

(25) 許穎「四十年来日本文筆人：当代声望最為崇高的作家横光利一」『華文大阪每日』四卷九期、一九四〇）三七頁。原文「作者所喜好的奇特人物和奇特的故事」。

(26) 李振声「上海（连载一）」（合肥：『科教文汇』、二〇〇四・九）二六頁。原文「一九二三年参加菊池寛山创办了《文艺时代》，发表了《蝇》和《太阳》，引起文学界的注目」。

(27) 黄玉燕「横光利一的文學世界」（横光利一著、黄玉燕訳『春天坐馬車來』台北：桂冠出版社、二〇〇〇・一一）六頁。原文「構思巧妙，立意獨特，横光利一在創作初期就顯示出不同於自然主義的瑰麗文體」。

(28) 黄玉燕「横光利一的文學世界」（黄玉燕訳『春天坐馬車來』台北：桂冠、二〇〇〇）一〇頁。原文「異曲同工的跟病魔戰鬥的故事，……內容的氣氛比前一作品明朗，具建設性」。

(29) 訳者不明、「母亲给我留下的茶」，重慶：『课堂内外：高中版（A版）』、二〇〇五）四三頁。原文「关于母亲的记忆，总是温情脉脉而美好动人，又岂止是在小小的茶杯里呢？」。

(30) 七類達「横光利一の変貌（下）―現代日本青年作家論（三）」（漢口：『新生半月刊』、二卷二〇期、一九四〇）一五～一七頁。原文「「上海」是他的新感覚派的時代的最後的東西，……在今日的時代，試再重讀「上海」時，深深感到的不是登場人物投的影翳和登場人物的表現形式，是盡於「東洋的運命」一語。是在「上海」中登場的幾個中國人和日本人們，現在過著怎樣生活的感概。在馬克斯主義的暴風雨狂吹著的一時代前的上海，横光是怎樣地把傳統思索著呢？」。

(31) 七類達「横光利一の変貌（下）―現代日本青年作家論（三）」（漢口：『新生半月刊』、二卷二〇期、一九四〇）一五～一七頁。中国語原文は「我在新感覚派地當時，總主張我們感覚派應該以悟性活動為中心而進行，所以把當時以感覚為第二的我構想，怎樣地向穆時英氏說明呢？暫時感到迷惑」。

(32) 楊之華「上海――譯自「支那紀行」」（上海：『中華周報』六期、一九四二）一四～一五頁。

(33) 日本語は『横光利一全集』（一四卷、河出書房新社、一九八二・一二）二五〇頁より引用。原文「「横光利一」這個名字在日本，幾乎是無人不知的：就是在我國的翻譯文學界裡，也是早已有了定評的人物。劉吶鷗、黄源等人，也曾陸陸續續把他的小說介紹入中國。統觀著横光氏的作品，都是描寫著現代資本主義

社會裡的腐敗期的不健全的生活。……而其風格常常有著抒情詩的香味和近代的明快感。……這篇sketch，是横光氏前年應日本軍部之邀，前來中國前線及長江一帶視察後，回國之作，後來即收入東京第一書房版的「支那紀行」一書中。……這個帶有Romance氣味的故事裡，滲透了愛國的思想。足為其國人以無上之鼓勵。……愛好横光氏的小說的讀者，也許可以從這裡讀到一些兒精神上的慰藉吧。」。

(34) 謝惠貞「中国新感覚派の誕生——劉吶鷗による横光利一作品の翻訳と模作創造」(『東方学』一二一輯、二〇一一・一)一二〇～一三九頁。

(35) 王洋「『芳秋蘭』の虚と実——横光利一『上海』における女性共産党員うぃめぐって」(『横光利一研究』一八号)六八～七〇頁。

(36) 鄭康伯「「横光利一」在中國」(上海:『社會周報』一卷二八期、一九三四)五五〇頁。原文同注二。

(37) 著者不明「小孟尝:横光利一第二代刘吶鷗」(上海:『红绿』一卷四期、一九三六)九九頁。

(38) 康「横光利一第三代穆時英的苦悶:既失了老婆仇珮珮又遭了清客們的罵」(上海:『社会日报』一九三六・二・一五、三面)。

(39) 康「小孟嘗横光利一第二代:劉吶鷗喜怒無常 楊邨人說:"不夠朋友,!"」(上海:『社会日报』一九三六・四・五、三面)。

(40) 清鳳「黑嬰:横光利一的第三代」(上海:『迅報』一九三九・三・二七、二面)。

(41) 鄭康伯「「横光利一」在中國」(上海:『社會周報』一卷二八期、一九三四)五五〇頁。原文「穆時英……他的文字……「艶得有點膩」。「公墓」這一書的諸篇、都帶著現代的都市味、其題材域很狹、在他的作品中所表現的差不多純是些舞場生活、或是、「帶著早春蜜味的羅曼史」。……說到黑嬰了、這個南方的矯健青年、其作風是直接地受了穆時英很多影響的!不過其描寫背景多屬南島一帶風了!……他永遠停在這個「舞」的圈子裡、他的文字也永遠停留在這個圈子裡!他們三人有一個共同點、就是造句差不多是些美的字眼的組合、尤其是穆感受這習氣最深、擇其較整齊的字句連串起來、使能成為一首象徴派的詩。……他們是多少帶點危險性的人、我想:如果大眾語實現、文字歐化將被打倒的話、他們就是第一個要延孚這厄運的人」。

(42) 陳麗汶「孤步舞結束以後:論中國歸僑作家黑嬰的成長小說」(台北:『中國現代文學』三三期、二〇一八・六)四九～五〇頁。

(43) 中国と台湾を問わず、戦後、読者や記者による雑誌新聞の記事が少なく、主に学術論文の範疇で扱われるようになっている。そのため、ここで紹介するのを省略する。

(44) 利三「横光利二語録(一)」(北京:『燕大旬刊』一卷三期、一九三五)一九～二一頁。

(45) 利三「横光利二語録:問:先生對第一次全體大會印象如何?」(北京:『燕大周刊』六卷六期、一九三五)一三～一五頁。

(46) 作者不明「編集小言」(北京:『燕大周刊』六卷六期、一九三五)一五頁。原文「一般的言論、受著統治者的摧殘、而在華北、更有日帝國主義的直接壓迫、大眾的呼聲、是早已聽不見了、

……我們的燕大週刊、……有它應負的積極的任務」。

(47) Reynal & Hitchcock, Inc, 1935.

(48) 陶之「横光利一介紹—現代日本作家研究之一」(南京:『新民報半月刊』二卷一五期、一九四〇)四二頁。原文「「新與舊」「歐美與日本的」中間的斷層、便造成了日本知性的混亂、……這種現象刻明的表現在文學作品中的、在日本首推横光利一的小說。横光利一這個作家、在中國是較為熟悉的、不過曾有人介紹過他的生平而且還有人翻譯過他的作品。……所以他的小說的世界、是很過著同樣知識的混亂生活的中國青年接近的」。

(49) 羅烽「記横光利一先生」(上海:『太平洋周報』一卷八五期、一九四三)一八六九頁。原文「當中日事變發生時不久、曾有一次到上海來、住在四馬路都城飯店大廈裡、他曾有過這樣真切的幻想:如果有這樣一個機會、在這大廈裡、集合一千個日本青年、和一千個中國青年、讓他們彼此非常坦白真誠地討論中日問題、或者會有一個很好的結果論的、至少、不至於會弄到因更深的誤解而彼此竟動起手來」。

(50) 張夢尼「時代與精神」(南京:『文藝月刊』一〇卷三期、一九三七)五六～六六頁。原文「帝國主義的暴君向防衛薄弱的我國進攻、使我全民族受著徹骨的痛創。……這異常不安的東亞的我人、讀了這篇有何感想?……我們東亞人類的覺醒、是否必須經一極慘痛的創傷、……再原作因目前的日本不能痛快暢達的說、故文字甚曲折晦澀。我譯此篇努力不失原作的精神、致詞句很晦澀、我希望讀者靜細的讀去、並請原諒我不能以暢達之筆來介紹」。

(51) 絵者不明「世界文壇漫畫巡禮:日本:横光利一的紋服新成、風行一時」(上海:『文藝畫報』一卷三期、一九三五)四三頁。

(52) 絵者不明「活躍在奥林匹克的三個日本作家武者小路横光利一」(『文化新聞』四期、一九三六)二頁。

(53) 劉吶鷗も戦前重要な訳者で、その『色情文化』は、横光利一の「七階の運動」の訳を収録しているが、検索には出てこなかった。データーベースの検索システムがまだ完備していないことを示唆しているが、現時点での検索結果で、翻訳の傾向、その中国語の読者による評価を理解するのに、意義があるだろう。

(54) 許秦蓁「漫畫/話女性:劉吶鷗與郭建英的「上海新感覺」」國立中央大學中國文學系主編『劉吶鷗國際研討會論文集』台南:國家台灣文學館籌備處、二〇〇五・一一)五一九～五二二頁。

(55) 郭建英「現代女性的模型」(『建英漫畫集』上海:良友圖書公司、一九三四)。陳子善『摩登上海:三十年代洋場百景』(桂林:廣西師範大學出版社、二〇〇一)一頁より転載。原文「Nonsensical(無內容)的腦細胞、Grotesque(怪異奪目)的上身、Erotique(肉感)的下身、原動力是金錢與Hormone(生殖元素)、It(熱)是她的生活武器。」。

(56) 李振声「上海(连载一)」(『科教文汇』二〇〇四・九)二五頁。

(57) 北京:『外国文学』一九九九・四)一四頁。

(58) 千葉宣一「横光利一の中国における受容」(『横光利一事典』

おうふう、二〇〇二・一〇）三〇～三一頁。

(59) 許俊雅「思慕微微送遠行的翻譯家黄玉燕」（台北：『文訊』、二〇一七・一一）五九～六〇頁。

(60) 楊迪雅、郭汝伶「劉慕沙小傳及著譯書目提要」（台北：『文訊』、二〇一七・六）六三～七〇頁。鄧敏君「劉慕沙翻譯文體的探索之路」（台北：『文訊』、二〇一七・五）六三～六五頁。

(61) 王海訳『春天乘著馬車來』新北市：新雨、二〇一九のカバー裏によると新雨出版社の王儷璉氏によるご教示。

(62) 『定本横光利一全集』未収録の「寄中國讀者（中国の読者に寄せて）」（訳者不明、上海、『文友』四巻八期、一九四五、一〇～一一頁）では、『旅愁』のパリのカフェでの出来事を引用し、中国人を含む東洋人の更なる交流を呼び掛けている。

モダニズム／コロニアリズム

——横光利一と「近代による超克」——

崔　真碩

はじめに

一九三六年夏、京城のモダニスト李箱（一九一〇～三七）は、短篇小説「童骸」で、横光利一（一八九八～一九四七）の新感覚派時代の宣言のひとつ「頭ならびに腹」（『文芸時代』一九二四年一〇月創刊号）の冒頭の言葉、「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けていた。沿線の小駅は石のように黙殺された」[1]をパロディ化した。

「一着の選手よ！　急行列車が沿線の小駅を非常に小さな碁石を黙殺して通過するように、私を無視して通過されることを望む次第でございます」

瞬間、姙の顔に毒花が咲く。間違いなくそうであろう。私は二着の名誉みたいなものは近頃では捨て去るのが心地よかった。それですぐにリレーを棄権した。この場合にも言葉を蕩尽した浮浪者の資格で恐懼、横光利一氏の出世作をこっそり取りだしてきたのである。[2]

李箱の分身である「私」は、「童骸」のクライマックスで、「姙」をめぐる「尹」との三角関係の恋愛＝リレーを棄権する。李箱のモダニズムにおいて、恋愛とリレーを近代の隠喩と捉えれば、これは言わば、李箱における近代を棄権することの宣言、すなわち、「近代棄権宣言」である。李箱はきっと、渡欧しているさなかの横光を意識しながら宣言しているのだが、生前、脚光を浴びることがなかった李箱のこの宣言が横光に届くことはなかった。しかしここで重要なのは、李箱が一九三六年夏に「近代棄権宣言」するとき、まさに「近代の超克」へ向かわんとする横光のテクストをパロディ化していることである。この「近代棄権宣言」は、「近代の超克」へ向かう／向かわない、横光と李箱のその後の分かれ目を予感

ISSN 1348-1460

横光利一研究

第19号

―― 特集「〈翻訳〉の季節―横光利一と同時代文学」 ――

特集趣旨「〈翻訳〉の季節―横光利一と同時代文学」 …… (1)
影響と翻訳の間――横光利一と堀辰雄の文学言語の転回―― …… 戸塚　学 (2)
伊藤整と横光利一の断層
――九三〇年前後の〈文学者ネットワーク〉という視点から―― …… 尾形　大 (15)
中国における「新感覚派」の展開と変容 …… 福長　悠 (28)
日本占領下の「淪陷区」における横光利一の翻訳について …… 劉　妍 (44)
中国語に訳された横光利一文学 …… 謝　惠貞 (58)
モダニズム／コロニアリズム――横光利一と「近代による超克」―― …… 崔　真碩 (79)
横光利一におけるシェイクスピア翻訳劇の影響――「日輪」を中心に―― …… 日置　俊次 (96)
横光利一『上海』の英訳における異国性の醸成
――英語での会話と言葉の連続性に注目して―― …… 大村　梓 (111)
横光利一『旅愁』における音楽の訳され方
――「巴里の屋根の下」と「マロニエ」を足がかりに―― …… 杉淵　洋一 (126)
《研究ノート》
文芸懇話会賞と翻訳 …… 山本　亮介 (145)
横光利一と小林秀雄の観たセザンヌ――パリ体験の〈翻訳〉―― …… 鈴木　美穂 (152)

「静かなる羅列」論――「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」―― …… 英　荘園 (158)

《資料紹介》
『定本横光利一全集』未収録資料紹介――講演「無題」、座談会「春宵閑談」―― …… 古矢　篤史 (172)
『定本横光利一全集』未収録資料紹介――島東吉「横光利一氏と語る」―― …… 田部　知季 (191)
『定本横光利一全集』未収録資料紹介
――「作家们的座谈会」・「寄中国文学者」―― …… 王　洋・中井　祐希 (200)

《クローズアップ横光》
文豪とアルケミスト朗読CD「横光利一」を聴く …… 芳賀　祥子 (233)

投稿規定／会則 …… (237)
論文要旨 …… (239)

2021年3月　横光利一文学会

横光利一研究　第19号　――特集「〈翻訳〉の季節―横光利一と同時代文学」――　二〇二一年三月

Yokomitsu Riichi Studies

Vol. 19.

Special Issue: The Translational Turn
――"Yokomitsu Riichi and Contemporary Literature"――

Objective of the Special Issue: The Translational Turn—Yokomitsu Riichi and Contemporary Literature …… (1)
Between the Influence and the Translation
—Yokomitsu Riichi and the Linguistic Turn in Hori Tatsuo's …… TOTSUKA Manabu (2)
Fault Lines between Itō Sei and Yokomitsu Riichi
—From the Perspective of the Network of Literati around the 1930s …… OGATA Dai (15)
The Development of the "New Sensationalist School" and Its Transformation in China
…… FUKUNAGA Haruka (28)
The Translation of Yokomitsu Riichi's Work in the Occupied Area under Japanese Occupation … LIU Yan (44)
Yokomitsu Riichi's Work in Chinese Translation …… XIE Huizhen (58)
Modernism/Colonialism —Yokomitsu Riichi and "Overcome by Modernity" …… CHOI Jinseok (79)
On the Influence of Shakespeare's Translated Plays in Yokomitsu's Work, with a Focus on "Nichirin"
…… HIOKI Shunji (96)
The Formation of Exoticism in Yokomitsu's *Shanghai* in English Translation, with a Focus on English Conversations and the Continuities of the Language …… OMURA Azusa (111)
The Translation of Music in Yokomitsu's "Ryoshū," with Examinations of "Pari no yane no shita" and "Maronie" …… SUGIBUCHI Yōichi (126)
《Research Papers》
The Award for *Bungeikonwakai* and Translation …… YAMAMOTO Ryōsuke (145)
Sézane as Seen by Yokomitsu Riichi and Kobayashi Hideo
—On "the Translation" of the Experience of Paris …… SUZUKI Miho (152)

On "Shizuka naru raretsu": "The geographical Cycle" as a Criticism of "Historical Materialism"
…… YING Zhuangyuan (158)

《New Resources》
Introduction of Sources Not Included in the Complete Works of Yokomitsu Riichi: Teihon Yokomitsu Riichi Zenshū
—The Lecture "No Title" and The Round-Table Discussion "Shunshou Kandan" …… FURUYA Atsushi (172)
Introduction of Sources Not Included in the Complete Works of Yokomitsu Riichi: Teihon Yokomitsu Riichi Zenshū
—Shima Tōkichi "Yokomitsu-shi to kataru" …… TABE Tomoki (191)
Introduction of Sources Not Included in the Complete Works of Yokomitsu Riichi: Teihon Yokomitsu Riichi Zenshū
—"Sakka Tachi no Zadankai" and "Chūgoku Bungakusya ni Yoseru" …… WANG Yang and NAKAI Yūki (200)

《Closing in on Yokomitsu》
Listening to the CD Audio of *Bungō to Arukemisto* …… HAGA Shōko (233)

Submission Guidelines・Organization Rules …… (237)
Essay Abstracts …… (239)

March 2021, The Association of Yokomitsu Riichi Studies

編集後記

■本号より編集を関東の運営委員で引き継ぎました。コロナ禍でどの学会でも同様のことと思いますが、オンライン会議での編集作業となりました。入稿から印刷までデジタルの時代とはいえ、メールとオンライン会議ではコミュニケーション不足になりがちな点は否めません。さて、次号は20号という節目を迎えます。そのための企画も準備しているところですが、論文など常にもまして会員からの積極的な投稿を期待しております。

■特集「〈翻訳〉の季節――横光利一と同時代文学」は、第18回大会（二〇二〇年三月二八日）の特集テーマを承けて企画いたしました。当日の発表者の他、広く投稿を呼びかけた結果、会員の内外から九本の論文と二本の研究ノートを掲載することが出来ました。もとより〈翻訳〉をめぐる領域のごく一部しかカバーできませんでしたが、この特集が今後の議論の出発点となれば幸いです。

■投稿論文として、英荘圜氏の論文を掲載いたしました。一九二〇年代に日本に紹介された「地形輪廻説」との関係を説く刺激的な論考です。

■「資料紹介」を三編掲載しました。古矢篤史氏による講演・座談会の紹介。田部知季氏は、会員外ではありますが、第二〇回研究集会での研究発表の際に関連資料として示された文献について執筆いただきました。王洋氏・中井祐希氏による中国語の資料は、本号の特集とも関わる貴重な資料です。

■「クローズアップ横光」は、広く横光利一に関するイベント、エンターテインメントを扱う場として創ってみました。横光や、横光に関連した展示、映画・演劇などのレビューの掲載をめざしています。今号には、横光作品の朗読CDについて寄稿していただきました。近年のマンガ・アニメ・ゲームなど、サブカルチャーのなかでの文学作品・作家の扱われかたの一つの例になるかと存じます。

■英文目次作成に関しては、鈴木和佳子氏にご協力いただきました。

【編集担当運営委員】
石田仁志、井上明芳、浦田剛、掛野剛史、加藤夢三、佐山美佳、友添太貴、中沢弥（責任者）、野中潤、芳賀祥子、松村良、松本雅之、山本亮介

横光利一研究　第19号

二〇二一（令和三）年三月一七日発行

編集者　横光利一文学会運営委員会編集担当
〒206-0022　東京都多摩市聖ヶ丘四―一―一
多摩大学経営情報学部　中沢弥研究室内
E-mail: edit@yokomitsu.jpn.org

発行者・発行所　横光利一文学会（代表　石田仁志）
〒112-8606　東京都文京区白山五―二八―二〇
東洋大学文学部日本文学文化学科
山本亮介研究室内
電　話　〇三（三九四五）七三八六
http://yokomitsu.jpn.org/
E-mail: jimukyoku@yokomitsu.jpn.org

学会HP

振替口座　〇〇一七〇―四―四二六五六

印刷所　（株）言行堂印刷
〒600-8821　京都市下京区壬生川通花屋町上ル小坂町一六―一
電　話　〇七五（三五一）七〇六三